東北女子大学・東北女子短期大学　紀要　No.50：157～181　2011

明治期に弘前に滞在したアレキサンダー　一家と其の時代

保　村　和　良*

Glimpses of The Alexander Family in Hirosaki in Meiji Period
—Through the memoir of the Fanny Gray Wilson Alexander —

Kazuyoshi YASUMURA*

Key words : アレキサンダー一家　The Alexander Family
明治期・弘前　Meiji Period, Hirosaki
ロバート・パーシバル・アレキサンダー　Robert Percival Alexander,Sr.
メアリー・クリスティン・ヴルーム・アレキサンダー　Mary Christine Vroom Alexander
ファニー・グレイ・ウィルソン・アレキサンダー　Fanny Gray Wilson Alexander

はじめに

日本では明治中期から後期にかけて、とりわけ教育面に於いて様々な変革が行われた。中学校令（明治 32 年）、実業学校令、私立学校令さらに小学校令（明治 33 年）と矢継ぎ早に文部省から頒布された。対外的には外国人も日本の法律、裁判を遵守すれば国内どこでも自由に居住、営業が可能ないわゆる「改正新条約」が発効された。

このような時代に来日したカナダ人ロバート・アレキサンダーとファニー・グレイ・ウィルソンの活動と民情に焦点をあて弘前を中心に考察してみたい。

ロバート・パーシバル・アレキサンダーは 1862 年 11 月 24 日にカナダのプリンス・エドワード島、スタンホープで生まれた。プリンス・オブ・ウエールズカッレジを卒業後マウント・アリソン・カッレジ、さらに 1891 年にハーバード大学に入学、なお同大学院にて MA を取得した。

1893 年 6 月 27 日、メアリークリスティン・ヴルームとノヴァ・スコシアのベア・リバーで結婚後、２人は７月 27 日、日本へ向け旅立った。

はじめは青山学院で教鞭を執り、1897 年（明治 30 年）７月に弘前の福音協会の夜間学校の校長に任命され、同時に東奥義塾の嘱託教師として迎えられた。明治 34 年の４月に私学の東奥義塾は弘前市立弘前中学東奥義塾と改称となった時代であった。アレキサンダーの雇用主は白銀町寄留長谷川哲治となっている。

この一家にとっての最大の悲劇は夫人のメアリーが火災によって焼死したことであった。1899 年１月 19 日零時 30 分に出火し、当時の東奥日報も連日にわたり報道している。

本稿で採りあげた資料は後にアレキサンダー氏が再婚したファニー・グレイ・ウイルソンの回顧録 “Memories of seventy six years recorded for My Children and Grandchildren 1944”「私の子供や孫達の為に書き記した 76 年の思い出」に基づいている。この資料は 156 ページのタイプ原稿で、青山学院資料センター所蔵のものと、弘前関係については子孫のマリリン・ガラハード夫人とロバート・ラッシュ氏から追加の部分として筆者に送付されたものを中心にまとめた。これは当時の弘前を外国人の目を通して市井の様子をうかがい知る事ができる貴重な資料である。

もう一つの資料は TIDINGS（日本からのお便り）である。そのなかでも、明治 38 年７月には露兵捕虜として来弘し、ロシア人大佐２名とアレキサンダー一家と交流の様子が記されているところは興味のあるところである。

＊東北女子大学

アレキサンダーの英語教授方については氏と共に教育にたずさわった教師の手記である。これもまた明治期の外国人による英語の指導法を知る事が出来る貴重な証言であると言えよう。

アレキサンダーの在弘は明治31年～34年で一旦帰国し、明治35年に再弘し、明治40年まで弘前に滞在した。本稿では当時の民情を知る上で欠かせない明治30年代の東奥日報記事を適宜引用してある。

なお、本稿で引用した英文資料の訳文は拙訳によるものである。

註）Fanny Gray Wilsonは弘前女学校で1903年（明治36）年4月から1905年（明治38年）まで校長職を務めた。
註）TIDINGSは1897年～1906年まで続いた日本の宣教活動の報告を定期刊行誌としてまとめたものである。この稿で引用した資料は1898年の刊行誌で印刷発行は青山学院実業部で価格は一部５銭、年間購読料は50銭であった。

1

アレキサンダー一家が住んでいた頃の弘前

弘前出身の柳田　泉は幼少の頃住んでいた当時の弘前の森町を中心に回顧録に残しているので柳田自身に語ってもらうことから始めよう。

森町は茂森町へぬける一本通りで、そう長い通りではなかったので、お互いの家のほかには格別子どもの遊び場がなく、ただ旧藩時代に時間を知らせるための鐘撞堂（かねつきどう）のまわりにあった小高い広場が、自然の遊び場となり、何かというとその広場に集まって遊んだ。然しそれだけではすぐ退屈するので、よくお城あとに行って遊んだ。そのころのお城あとは、今とちがって手入れも何もなされておらず、石垣、天守なども昔のままで、兵営が一部に出来てはいたが、一般の人はむやみに出入りはせず、松や樫や熊笹の生えさかった、さびしいところであった。（中略）それから覚えているのは東奥義塾の周囲の花ひろいで、これはその柵の中に一杯桐が紫の花をつける。それを拾っていろいろな遊びを道具にするのである。（中略）なお、これは始終ではないが、一時弘前にもリバイバル・ブームみたいなことがあったらしく、土地にいる外人牧師（アレキサンダーさんといったが）先頭に立って、各町内でキリスト一代記の幻燈会をやったことがある。私の町内でもそれをやったが、その幻燈会が、始めてなだけに私を余ほど感心させたものと見えて、その時の一代記の十二節が、今だに昨日のように鮮やかに記憶に残っている。路の両側に葡萄がふさふさと実っているところを、騾馬にのった婦人と子どもが悠々と通るといったシーンであるが、その葡萄の紫色と空の青々とした色が、六十余年の今でも眼をつぶると眼底にすぐ浮んでくるのである。（以下略）
註）（「明治の書物・明治の人　柳田　泉」p264～265）

柳田　泉　　明治27年4月2津軽郡豊田村外崎に生まれる。玉城高等小学校卒業後明治42年東奥義塾へ入学。東奥義塾が工業学校に転用されることのなったために、明治44年青森中学へ転校。昭和10年母校早稲田大学文学部の教授となった。昭和44年6月7日歿。明治文学研究者　翻訳者としてかつやく「カーライル全集」チャールズ・ディケンズの「二都物語」の翻訳者でもあった。三宅雪嶺や幸田露伴等と共に「明治文化全集」に参画した。
『（国史大辞典）』

2

TIDINGSに見る報告
1898年（明治31年）1月
R・P・アレキサンダー報告
January, 1898

過日、政府の認定条件に合わず東奥義塾の中学校の指定が認められませんでした。現在は再び私

立学校となりました。一時、校長を勤めた田中氏（筆者注：田中耕一）は最近辞任し、代わりのポストには杉山氏（筆者注：杉山熹之進）が再任されました。聖書の解読の授業はアレキサンダー夫人（注：メアリー・クリスティン）が担当しています。（中略）祈祷週間も終わり、１月９日の日曜夕拝には 19 名の出席を見ることができました。その中には夜間学校の生徒たちが何人かおりました。そのうち何人かはオットー宣教師のバイブルクラスの生徒になりました。今年の冬は素晴らしい集会になることを願っています。

1898 年（明治 31 年）３月
March, 1898 Vol.I.-No.4

（前略）２年前から東奥義塾に大きな変化が現れてきました。当時は明らかに反キリスト教的であった気運が今や完全に消え失せました。ついこの間までは、校長はたくさん教える必要もないし、さらに進度も考える必要もないと言ったのです。今、私は１週間に５時間教えています。学校は何とか維持していますが、わたしは学校とつながりを持つことで、良い関係を保つことができると信じています。私達と学校は以前と同じような関係にあります。教会の最も活動的な若い２人の男性は学校の仕事をしています。佐藤氏は教師として、木村氏（筆者注：木村敬之助）は寮監として勤務しています。もう１人は平田氏ですが、彼は名古屋の教会の牧師で青山の卒業生です。長谷川氏（筆者注：長谷川哲治）については述べる必要はないと思います。教会に来ている学生たちの数人は最近洗礼を受けました。忘れてならないことは、牧師の三分の一はこの学校（東奥義塾）から輩出されていることです。（以下略）

1898 年（明治 31 年）４月
April, 1898 Vol.I.-No.5
メアリー・クリスティン・アレキサンダー報告

（前略）弘前にある私達の教会に一人のおばさんが週に一回開かれる婦人会によく出席してくれるのです。確か、去年の十一月だったと思いますが、初めて出席してくれました。このおばあさんはとても貧しくて、その上殆ど文字が読めないのです。ミス・オットーの家で開かれた集会にこのおばあさんが出席してくれたことをミス・オットーはとても喜んでおばあさんの話を聴いてくれました。不遇な彼女は自分は無知でその上愚か者であるために他人を助ける事などとてもできないことを集会の席で話しました。そこでミス・オットーは孫娘に読んでもらう（聖書を）ことはできないのかとたずねましたが、このおばさんが言うには朝から晩まで働いているのでとてもそんな時間などないと言うのです。日曜日でも教会から帰ればすぐに働かなければならないのが実情のようです。（中略）

このような事情で私達は女性たちが文字が読めるようになるための助けとしてバイブルクラスをひらくことにしました。私達は１月の９日の日曜日の午後に始めたところ通訳の先生と聖書を教える先生を除いて平均６人以上の女性が集まりました。

参加したある女性はその日の夜に娘に出席できてとても幸せな気分だったと話したそうです。最初はとても満足に読むことすらできなかったのですが、今ではだいぶ読めるようになりました。このおばあさんは日曜日には働くのをやめて、午後のバイブルクラスには休まずに出席するようになりました。

ミス・オットーは一週間に２回、幻灯を携えて伝道活動を継続して行っております。週間祈祷会を自宅で行い、夕方になると夜間学校で教えたりしています。（中略）女学校の卒業式の練習が３月 31 日の水曜日に行われ、次の人達から卒業式の挨拶を受けることになりました。ミス･ヒュエット、長谷川誠三氏、私達の長老司であるドレーパー氏と工藤氏（当時の教頭）です。（中略）

私達が必要としていることはたくさんありますが、今、早急にしなければならないことは幼稚園を設立することだと思います。日本人は幼稚園の設置を特に切望しておりますので、教師の手配さえできれば、建築費用の募金をする用意があると

申し出ております。このようなまたとないチャンスを教師に支払う資金がないという理由で逃してしまっていいものでしょうか。ミス・ヒュエットは彼女ができるすべてのことを報告し相談すると思います。私達はこの事を祈り、神様の手に委ね、それが最善ならば神様はその業が必要ならば与えてくださることを知っています。私達が確信できることは良きスタートをきれば、これから不足する必要な資金は与えられるはずです。

1898 年（明治 31 年）7 月

January, 1898 Vol.I.-No.8

（前略）五月の下旬に幼稚園が開園しました。この重要な仕事に対してミス・サウザードの献身的な奉仕を高く評価するものです。四月に赴任して以来開園に必要な教材の準備に熱意を以って取り組んでいます。報告になりますが、現在園児は僅か 20 人足らずですが、もう 20 人受け入れれば間もなく 40 ～ 50 人になるはずです。一人は東京へ引越しますがその穴埋めは直ぐに埋ることでしょう。なぜなら、入園希望の園児が待っている状態だからです。そのために保育の仕事がよく中断されてしまうのは嬉しいことです。父母たちからは自分の子供がおかげでとても良く成長したという事を耳にします。教師自身も園児の成長過程を観察できるのです。園児の授業料の納入状況がとても良いことはとても喜ばしいことです。
幼稚園に通わせることで今まで教会に行った事のない母親達が教会の婦人会に出席するようになりました。神様の恵みが私達の新しい仕事に注がれていることは確信できます。これからも神様から与えられことを信じ歩むことでしょう。来る９月には多くの園児たちがここに集められることを願います。エラ　ヒュエット

3

アレキサンダー夫人の火災による死亡報告

1899 年（明治 32 年）1 月 18 日

D. S. スペンサーによるアレキサンダー婦人の火災による死亡についての報告によるとこうである。

The Translation of Mrs.Alexander

Vol.II.-No.1

「生と死は真に表裏一体であり、実に私達はその中で生きています。（中略）1 月 18 日の夜は雪も深く地面を覆い、大変寒い日で各家庭で行なわれた祈祷集会からそれぞれ帰り安らぎの床に付いた深夜のことでした。　真夜中を少し過ぎた頃に召使が既に家が猛火につつまれているのに気がつき料理人の妻が大急ぎで家族と同居中のバイブル・ウーマンを起こしに２階へ駆けつけました。（中略）

夫妻と五歳になる息子のジョージのいる二階の寝室の向かいにある居間には寝る前に衣服を置いてあったのです。夫人はまだ二階までは火の手が上がって来ていないと思い衣服を身につけようと思ったのですが、その時にはすでに子供部屋の天井の壁紙には火がつき盛んに燃えていたのです。

アレキサンダー氏は息子のジョージを抱きかかえ廊下の窓からポーチに逃げ、次に夫人を助けようとして居間に戻ったときには炎に包まれ彼の呼びかけには夫人の応答はありませんでした。彼は夫人が床に倒れて気を失っているのではと思い探そうとしたのですが、あまりにも炎の勢いが烈しくどうにもなりませんでした。彼は二階の居間の窓から地面に落ちたのですがポーチの柱によじ登りジョージを助けたのでした。彼はジョージを救い一階の書斎の部屋に重要書類が引き出しの中にあるのに気がつき取りに戻った時点では既に夫人は救出されていたものと思っていました。このようなことで彼の手と腕の切り傷は相当ひどいものでした。

夫人を手分けして探した結果、悲惨な事実が判明しました。それは夫人が建物から逃れたのではなく炎の中で非業の死を遂げていたのがわかりました。今となっては何故逃げなかったのかわかりませんし、これからも事実はわからないでしょう。窓からは何一つとして放り出された形跡もなく彼

等の所持品のいくつかを持ち出そうとした様子は全くなかったのです。息子のジョージを腕に抱きかかえ逃げたのを見た人はいたのですが婦人を見たという人は誰一人いませんでした。夫人の焼死体は焼け跡の中から判別できないくらいの状態で発見されたのです。その発見された場所から推測すると、どうやら夫人はアレキサンダー氏のあとを追わずに子ども部屋を通ってどこかに逃げ場を求めたようなのです。そのうちに炎に夫人は包まれ逃げ場を失ってしまったのです。

消防夫が泣いているジョージを女性達の家へ連れて行きましたが顔や手は水ぶくれを生じておりひどい状態でしたがじっと痛みに耐えていました。アレキサンダー氏の状態は髪の毛は焼け落ちてしまい顔や腕はひどい火傷を負っていました。この親子の回復には充分な時間が必要でしょう。すぐに伊東博士（筆者注：伊東　重）の万全の治療処置が施されました。この火災の原因は全く判らず近所への類焼は免れました。放火説もありませんでした。（中略）

葬儀は弘前で1月22日の午後に執り行われ、埋葬は同地で行なわれました。これは残された夫アレキサンダー氏の意志もさることながら亡き夫人もそう願っていることでしょう。（筆者注：この埋葬は現地主義によるものである）小さな教会は善良な人々で一杯でした。弘前市の郊外にある教会の牧師たちも葬儀に参列しました。夫人は市内にあるお寺の小高い一区画におさめられました。（筆者註：最勝院の奥に位置している基督教関係の墓地がある）そこからは市内を一眺できるところです。葬儀の準備は教会員によって執り行われました。これはすべて中田牧師が取り仕切りくれました。駆け付けた宣教師達はアレキサンダー親子を取り巻く人々の善意と援助の姿をみて非常に心を打たれました。（以下略）

デイヴィッド・S・スペンサー

4

東奥日報記事に見るアレキサンダー家

出火とアレキサンダー氏一家の惨禍

弘前市下銀町なる美以教会教師アレキサンダー氏の一家が一昨十九日午前零時半過火災に罹りし趣は取り敢へず昨日の紙上に略報し置きたりしが発火の原因は未だ詳細に知るを得ざれども　丁度零時半とも覚えし頃　たまたま同所を通り懸かりし人　火事よ火事よと大呼し続いて真っ先に駆けつけたりし警察官が同家の入り口を蹴破りて躍（おどり）入りし頃は已（すでに）同家廊下一面の猛火にて面（おもて）を向けべくもあらず此数分前一番に火事を認めたる同家雇料理番の妻某は忽（たちまち）アレキサンダー氏夫人の寝室に馳行きて急を告げ速やかに逃去るべしと迫りたるも寝衣（ねまき）のままなる同夫人は少しく躊躇しつつあり　同時アレキサンダー氏は兎に角愛児［当年満四年］を救わんとて之を抱き上げたる時は廊下一面の猛火にて階下より降（くだる）べくもあらざるより余儀なく楼上の硝子窓を破りて愛児を投げ出したる所　幸いに下には二名の消防夫ありて之を抱き取りたる為差したる大怪我にも至らず　続いてアレキサンダー氏同楼表を見懸けて（みかけて）窓より飛び下り雇料理番妻某氏も窓より飛び下る際強く脊椎を打ちて一時絶息したるも之又消防夫に援けられて塩分町なる外国人の居所に引移され其鎮火を為したるは殆ど払暁にてありたり　然るにアレキサンダー氏初め料理番妻某及びア氏愛児等孰（いずれ）も面部其他負傷を受けて辛（から）くも一命を拾いたるは不幸中の幸福なれども最も悲絶惨絶言う斗（ばか）りもなき惨事こそ起こりたれ　そは即ちア夫人の焼死せる事にして最初料理番妻某か同夫人を遁れ（のが）しめんとしたる際同夫人寝衣（ねまき）のままなる為逃げ出づるのに躊躇の色ありしも多分焼死するが如き惨禍に遭うべしとは露聊かも（つゆいささかも）思う所にてあらざりしが　やや鎮火の模様に立ち至れるも如何なる訳や　同夫人を認めたる者一人之なく　知り合いの先々に人を走らして同夫人の行衛（ゆくえ）を探索したるもの一向に要領を得ざるより扨（さて）は同夫人も果（あえ）なく焼死の惨禍は罹らざりしかやと懸念の余り消

防をして焼け跡を穿鑿（せんさく）せしめたるや　果たして同夫人の死屍あり一方に其塩分町に引き移りたるアレキサンダー氏及同氏愛児は即時医師を招きて丁寧な治療を加え就中料理番妻某の如きは非常の重傷にて一時は生命も覚速（おぼつか）なかるべしとの評判なりしも同日午後に至るや漸く（ようやく）一命を取り留め得べしとの事にてア氏には驚該（きょうがい）の余り普通の感覚を失い種々の妄言を口走り居る有様故医師の勧告にて一切面談を謝絶し今尚臥床苦呷（がしょうくきょう）の由なるか身万里（みばんり）の波濤の越えて布教の為はるばる当懸に来り　一朝火災に遭いて愛児と共に重傷を負い　殊に最愛夫人の焼死せるか如き吁（ああ）之何たる悲絶惨是絶（ひぜつざんぜつ）の椿事（ちんじ）ぞや余輩は今此悲報を耳にして熱涙の滂沱たるを覚えず　満腹の同情を奉げて其不幸を吊（ちょう）せんと欲するものなり

註）（明治 32 年 1 月 21 日　東奥日報）

ア氏を慰問す

別項記載せるが如きアレキサンダー氏が計らずも悲絶凄絶の惨禍に遭うや弘前市長同助役参事会員市会議員一同弔意の意志を表せんとて弔詞金圓を添え長尾市長はア氏を訪して親しく慰問したりと云う

ア氏夫人は英領カナダの人にして富豪の一人娘なる由なるか殊に文学に秀でて亦音楽に巧みにして中々の淑女なりと云う　今一朝火災に遭いて焼死の惨禍を蒙る　之何の縁因ぞや

註）（明治 32 年 1 月 21 日　東奥日報）

不幸なる外国人に対する義金募集

弘前市居留外国人アレキサンダー氏一家の惨禍に罹りしとは前号に詳報せし処誰か之を聞きて熱涙の滂沱たるらざるものぞ誰か同情の感に打たれざるものぞ義気に富める弘前市の有志中　佐藤弥六、伊東　重、中田多七、成田彦太郎、木村象一の諸氏及び弘前新聞社にては早くも左の檄を伝えて義金募集の挙に出て以てア氏の不幸を弔慰せんとす　アヽ是れ唯（ひとり）り弘前市のことならんや懸下の慈仁者奮って（ふる）此の美挙に賛せよ

註）（32 年 1 月 21 日　東奥日報）

義捐金募集

一月十九日午前零時十分　不慮の失火は東奥義塾構内教師館アレキサンダー氏の宿所を寓炎盡し（つく）人事稀に見る所の悲劇を演じぬ　即ちア氏及其の愛児は負傷せり而して其家財は悉く挙て鳥有に帰せり真に惨又極言語の能（よ）く弔慰すべきなきを覚ゆ

（以下略）

註）（明治 32 年 1 月 22 日　東奥日報）

外人惨禍彙報

弘前市居留外国人アレキサンダー氏方出火の際負傷したる料理人の妻は一時生命のみに助かるべしとの事　実は容易ならぬ大傷とて伊東医学士の手術も其の功なく目下危篤に迫り居ると云う▲焼死したるア氏夫人の葬儀は今廿二日午後執行せらるる由▲ア氏には出火の当時余りに忽急のことにて辛くも一命丈助かりしまでなれば着たままの丸焼けにて昨今非常の難儀を極め居るより同市の有志者中に衣類等を寄贈する人も続々ありと

註）（明治 32 年 1 月 22 日　東奥日報）

故ア氏夫人の葬儀

去る十九日午前一零時過ぎの火災にて敢えなくも焼死の惨禍に罹りたるア氏故夫人メリー、ジ、アレキサンダー氏の葬儀は予報の通りいよいよ去る二十二日午後二時より先ず弘前市大字元寺町なる美以教会堂に於いて執行されしが今其の順序を聞くに弘前教会牧師中田久吉氏　当日の司葬者となり夫より聖歌集貳百三の節を歌い黒石教会牧師藤田匡氏祈祷をなし夫より大館教会牧師　平川某氏は旧約聖書第四篇第九十九十篇　五所川原教会牧師　飯沼正巳氏は新約聖書コリント前の書なる

第十五章を朗読し再び聖歌集第三百十九　六節を歌い続いて青森教会牧師　河野善一氏は同夫人の履歴書（次号に記すべし）を朗読し次に西舘庸一郎氏は各地より来れる弔電十八通を朗読し了って青森教会信徒代表　長谷川有造　弘前女学校総代　葛西きよ　東奥義塾長　杉山熹之進　弘前高等小学校代表　東海武一氏の弔詞を朗読し　夫より聖歌集第三百六十五節を歌い最後に同教会派遣宣教師函館連回区　長老ギデオン・フランク・ドレパル氏の剴切（がいせつ）なる勧めを成し　聖歌終りの第二節頌歌（しょうか）を歌いて同教会堂より出棺したるは午後三時半にて弘前音楽隊先駆を為しドレーパル氏及び東京より特派せる宣教師スペンサーの両氏棺前に列し中央には同夫人の棺を出し後には九名の外国婦人付き添い　続いて会葬者一同後方に隨い元寺町橡木（とちのき）を経て墓所より大圓寺境内に至り葬送の式全了わりて埋葬せる由員に記す　同日会葬者は外国人　ドレーパー、スペンサーの両氏を始め在青森外国婦人三名、在函館外国婦人二名　東京より特派せられたる外国婦人壹名　在弘前外国婦人三名　外は弘前市長　市参事会員　市会議員　弘前警察署長　及び警官数名　第一尋常中学校　市内各小学校職員　市学務委員　東奥義塾職員　及び生徒　同教会信徒一同無慮五百余名なりき

●騎兵第八聯隊　将校以下の弔慰

弘前なる騎兵第八聯隊将校一同より金拾円　同聯隊　下士準下士　一同より金五円をア氏一家の不幸を弔慰する為弘前市長の手を経て去る廿一日其寓居に寄贈したりと云う

●慰問に対する挨拶

ア氏一家が悲絶凄絶（ひぜつせいぜつ）の惨禍に罹りたるため弘前市長　助役　市参事会員　市会議員　其の他の人々から金圓又は種々の物品を寄贈して取敢えず弔慰を表したる為別記載のギデオン、フランク、ドレーパル氏はア氏に代わりて去る廿一日弘前市役所及び弔慰せる人々に対し挨拶に出たりと云う

註）（明治 32 年 1 月 24 日　東奥日報）

5

TIDINGS に見る報告

1899 年（明治 32 年）3 月

March, 1899 Vol.II.-No.3

先に婦人海外宣教協会の一人が悲惨な火災の事故で昇天しましたが弘前に於ける夜間学校は見事に維持運営されています。彼女は週に四日出席しておりました。夜間学校のために借りている部屋はいつものように一杯になっています。

２月 12 日には８名が弘前教会で受洗しました。翌週にはとても感動的な愛餐会が開かれ、30 人を越す会員がその会に与りました。婦人海外宣教協会の校舎のための基金募集が開始されました。幼稚園建設のために何件かの寄付金はすでに集まっています。

1899 年（明治 32 年）4 月

April, 1899 Vol.II.- No.4

アレキサンダー夫人について

私がアレキサンダー夫人に最初に出会ったのは 1894 年の 10 月の最初の日曜日に東京の青山の彼女の自宅でした。出会って間もないのですが、私の彼女に対する印象は優しさと強い精神力の持ち主であることでした。より緊密な出会が始まったのはアレキサンダー夫妻が弘前に任命された二年後のことでした。当時私は一人で仕事をしており、私が助けを必要としている時には夫人は強く励ましの言葉と同情心をもって応援してくれた友人であることがわかりました。（中略）

アレキサンダー夫人の日曜日の午後におこなわれるクラスの出来事は彼女のことを最も良く現しているのは夫人のクラスに出席していた女性の娘さんの話です。「母はアレキサンダー先生のバイブルクラスに熱心に出席していました。母は一週間で日曜日の午後が最も幸せな時間だとよく言っておりました。確かに母は精神的にも教養の面でも大いに得るところがありました。十分な教育を受けていないので母は殆ど読み書きはできませ

ん。私が函館の女学校に九年ほどおりましたが一度だけ母からやっとの思いで書いた手紙をもらったことがあります。母は自分が無学であることを心配して私を（函館の）学校へ入れたのです。アレキサンダー先生と婦人伝道師の指導のお陰で容易に書くことができ聖書を読むことができたのです。今ではきれいな字でいつも手紙を書いて送ってくれます。母はアレキサンダー先生の急死の事を聞き深い悲しみにくれております。夫人が母に読み方を教えてくれるためにもらった小さな読本が母が学んだ形見となっております。アレキサンダー夫人はすべての家族のために彼女の全生涯を主に捧げ尽くしたのです。

以上私が紹介した弘前で生活した頃のお話は人々の記憶から消え去る夫人のアイデァかも知れませんが、彼女のすべてを使い尽くした生涯と悲劇的な死は残された私達の心の中心に永遠に残っております。アリス・M・オットー

1899年（明治32年）
弘前
函館　ワドマンによる報告
December, 1899 Hakodate Wadman

女学校の新学期が４月に48人の新入生を迎え全部で156名となります。（以下略　施設　教室の不足を嘆いている）

多くの新入生達は高等小学校して入学してきますが、本学の卒業生の何人かは上級のクラスへ進学します。他の先生達が会議で不在中に西舘氏が中心になっている夜間学校もお陰で順調に行われています。恵みを受けた一人の兵隊が今度は自分の部下の兵隊達を殆ど毎晩私達の教会に誘い連れて来ました。長期にわたり学校の先生達の出席が続いております。聖書の勉強に大いに興味を示しております。（以下略）

（前略）夜にはアレキサンダー氏と牧師の二人が幻灯会を開き集会をもっています。この集会には多くの子供達が早くからやって来て平川夫人と大富さんが子ども達と一緒に歌を歌って奉仕をしております。幻灯会が終わると力を込めた熱意のある短い説教をしてくれます。それが終わると歓迎の集会が開かれ、そこでは畳の上に車座になって座り焼いたカボチャをつまみながら向かい合って親しく話をします。（以下略）

6

明治30年代に於ける弘前市の状況

明治31年10月10日に第八師団司令部が設置され、司令部を初め、兵営の建築や将校用の官舎、家族用の賃貸住宅などの新築も盛んに行われた。軍を中心とした経済効果が市民生活にもその影響が見られた時代であり、その活気づいた民情が伝わってくる記事が掲載された。

▲市中雑観を申し上ぐれば昨今のヒロサキは日一日と移り異なり目に見ゆるようで、先ず朝早くガランガランの声は市内用達舎の赤車の鈴、夫からチリンチリンは新聞屋、煮豆屋、次は醤油売り、彼れ此れすると各隊出勤の将校御馬でピンシャン、商店の番頭、自転車でピュウーンと馳せりけり来たれば、学校通いの子供等はワーッとどよめき出し申し、その後へ荷馬車、人力車、往来の頻繁なること著敷相成り候

電燈は来年一月元旦から弘前の市中を不夜城ならしむ由、願わくは再び消えざらんことを祈り申候

▲夏物買い出し　代官町角は二店の五日間の売り出し始められたり　角み呉服店にては万国旗球燈、国旗など諸飾り付けを為し本日も早朝より頗る雑踏極めた居れり

▲自転車流行　先ず流行と云って可なるものならん本町及び下土手町辺りの青年者流行は毎夜店を仕舞うや否やヒラリと打乗りて春を帆の如くにふくらせ市の東西を奔走するが昨今珍しくなくなれり鈴の音あれば自転車チリンチリンと

註）（明治33年6月27日、
明治33年10月16日東奥日報）

1900 年（明治 33 年）８月

弘前における夜間学校

Ｒ．Ｐ アレキサンダー

August, 1900 Vol.III.No.8

４年ほど前に始まった弘前の夜間学校は様々な点で成功を収める事ができました。その中でも最も困難であったのが立地条件の良い場所を捜すことでした。２年前と同様に教会と同じ通りにあり、あまり遠くない所を確保できたのです。出席者も増え収容できる場所を増やさなければならなくなりましたが、限界があることに直面しました。それは遠くに場所を求めることは仕事を成し遂げるにはとても困難を生じることになります。「英語」学ぶというはっきりとした目的がありますので学生の多くは中学校の高いレベルの学生です。出席者のかなり多くは公立学校の先生達です。何人かの兵士達も常に出席しています。

英語を学ぶ学生の立場からすれば、英語の良くできた教師を要求すること。これしかありません。また、私達からすれば、立派なクリスチャンの先生方を求めているのです。過去６ヶ月間は条件に見合った教師を確保することに大変苦労しました。優秀な教師を見出す事は本当に稀な事です。英語を十分に理解できる先生たちは私達が彼等に支払える以上の給料を要求されます。短期間で私達は６人もの先生達を雇わなければならなくなりました。このような変化が仕事に支障を来したわけですが、それでも、ある程度の成功を収めることが出来ました。損失の部分もありますので、正確な全体の結果の統計を出す事は出来ないものと思われますが、この仕事は教会の青年会が導いて行くことでしょう。

外国人の教師達と親しくなっていくことは抵抗なくバイブルクラスのメンバーになり、日曜学校のメンバーはまもなく改心することでしょう。WFMS（婦人海外宣教協会）の宣教師たちは常に自分たちの出来ることに厚意をもって援助してくれます。夜間学校の大部分は彼女達の力にかかっている状態です。聖書朗読会と祈祷会の組織会は毎週開かれる集会に簡単な小冊子を用いてのお話や熱心な奨励が合同で行なわれることがあります。ヒュエット先生が弘前に戻ってから定例集会の前に３０分間バイブルクラスが行われます。このバイブルクラスはこれ以来順調に行なわれています。

この仕事は私達の努力の大変重要な位置におかれ、青年達の知識を増やすことがこの世にふさわしいものとなるだけでなく神ご自身と青年達と真のつながりを持ことになるのです。是こそが成功の真の評価であると信じています。

「弘前教会五拾年略史」によると明治三十四年一月の記録には次のように記されている。

福音夜学校をアレキサンダー師　五丁目に移し、在学生七十余名となれり。月水の両夜は基督教講話会　幻燈会を開き、毎回の幻燈会には二百名程参会せり。（p35）

1904 年（明治 37 年）１月

January, 1904, Vol.VIII-No.1

ファニー・ウィルソン・アレキサンダー報告

（前略）去る 12 月 24 日の朝に幼稚園のクリスマス会が行われました。お部屋はきれいに飾られ両親やお友達を前にしていつものように演技を上手にやり遂げました。いつもより緊張したのは子ども達が聖書の絵の幼子キリストを発表するときでした。この会の終わりに子ども達は手作りのプレゼントを親達に手渡しました。

午後には親しい子ども達と住み込みの使用人のために我が家にはクリスマスツリーが置かれました。十二人の子ども達がクリスマスツリーに明かりが灯された居間に入ってくるまで息子のジョージは何も気づいていませんでした。子ども達は一瞬言葉も出さずに立ちつくし、その張り詰めた静けさが今度は喜びの叫びに変わりました。その喜びの叫びはクリスマスツリーやプレゼントを準備するまでの労苦に対する感謝の意味を込めていました。彼らが立ち上がって私達を見つめた時、ク

リスマスの意味についてのお話しとなぜこの時期にプレゼントをするのか簡単にしました。その後でみんなで“主我を愛す”を歌い、お母さんたちの一人が簡単なお祈りをしてくれました。

本当にすばらしいクリスマスでした。辺りは一面深い雪に覆われて、雪の重さで木々は今にも折れそうです。太陽は澄みきった空気の中で光り輝いています。すべてのものはクリスマスに相応しく、その思いがみな融合して一つになるのです。（中略）この季節には地上の雪は２フィートにもなり覆われてしまいます。

女学校でのクリスマスの練習が午前中におこなわれました。礼拝堂は多くの人達を収容するには狭すぎるので卒業生と教会の役員以外の一般の人達を入れることは不可能です。上級クラスの生徒の一人が演奏を始めると生徒達は音楽に合わせ入場して一曲が終わるまで立っています。生徒用の長椅子がないので、終わると床の上に座わるのです。これはストーブが附いていないので長椅子に座るよりはむしろ畳敷きの床の方がかえって足が温まるからです。

例年のように歌、暗唱、対話文等の発表があり、終わりに卒業生からの証の言葉が行われました。私達の学校の先生達の殆ど全員が８ヶ所ある町内の日曜学校や、教会の日曜学校の仕事を受け持っています。

教会の飾り付けは青年会の仕事です。教会内に絵や旗そして常緑樹の枝の飾り付けをするだけでなく、旗を付けた何本かのロープを教会の塔から通りの反対側に張るのです。（以下略）

300 人から 400 人の子ども達が座るために礼拝堂のイスはすべて移動されて、床には畳が敷かれるのです。そこでは集まった子供達の輝かしい表情をあちこちで見うけられます。９ヶ所ある日曜学校はそれぞれに出し物を７分間与えられ発表します。内容は子供達による聖書の一節の諳誦、お話、歌、対話劇等でとても上手に行われます。（以下略）

行事の終わりには牧師から日曜学校に忠実に出席した事に対しての賞賛の言葉を子ども達向けに簡単にお話してくれました。（以下略）

1904 年（明治 37 年）
弘前　Hirosaki
November, 1904, Vol.VIL.-No.11 p161

「あなたにとって戦争は宣教活動の大きな障害となっていることと拝察いたします」このような便りが時々、本国から寄せられますが、事実、弘前も例外ではありません。

この夏には何千人もの兵隊が弘前に駐在していますが、彼等は規律がとても厳格で秩序正しく行動し全てが今までと変わりなく穏やかです。外国人の女性が彼等にパンフレット（キリスト教の冊子）を通りで配布していても、常に礼儀正しく接してくれ、嫌がらずに普通に受け取ってくれます。

ところで何故なのか神の摂理のうちに、４月に私達の教会は焼失してしまいました。私達の教会は市内の本通りに位置しており夏になると兵士達が通りに繰り出して賑わいます。（中略）

私達は火災で失った代わりとして日本人と外国人のためにできる限りのことをやっておりますが、皆さんの（アメリカ人）の援助を必要としています。現在は日曜学校と朝の礼拝を女学校で行っておりますが、不自由ながらも、夕拝は二階のどこかの部屋で行われています。夏季休暇から弘前に帰ってきて気がついたことですが、弘前第八師団の出征兵士を祝うために通りには夥しい数の旗と提灯で飾り付けられたアーチが建てられていました。勇敢な兵士達で詰め込まれた列車は次から次と弘前駅を後にし、それは１２日間も続きました。駅には市民の代表の人達が兵士達に別れの「万歳」を唱和するために集まりごったがえしていました。殆どの人達は沈痛な思いであったと思うのですが、表には出しませんでした。軍人達を見送った彼らの妻たちは赤十字の篤志看護婦人会で奉仕のために出かけていきました。女学校も奉仕しているこの衛戍病院のために女学生達が縫い物を一手に引き受けているのです。数百人の兵士達は既に傷病収容所にいる人達の代わりとして派兵されています。この病院では後に兵士の宿泊

所とされたのですが、他の見舞い人達と同様にクリスチャンが持ってくる伝道用の小冊子、本、雑誌、お花などは何時も喜ばれています。もしキリスト教関係の印刷物の蓄えが十分あれば最近では配布ができるチャンスがいくらでもあります。病院にいる男性患者や兵舎にいる兵士達は読み物に本当に飢えています。（中略）

３年ほど前になりますが、一人の若い兵士がある日曜日の夕礼拝で聖餐台の前に立って教会員の一員となりました。彼は軍隊での軍務期間も終われば、ここから遙か遠くにある村の実家に帰ることになっていました。聖餐台を前にして烈しく興奮した顔つきで牧師の顔をじっと見上げました。（中略）牧師は若い兵士に神の言葉の教えを信じるかどうか尋ねたことに対して彼は心から信じると答えました。彼はいつかは戦地の最前線に送られるのです。彼はまた次のように尋ね、「もし、戦場で戦って、弾丸が飛び交う最中で私に弾丸が当たり死にそうになって神様のことが考えられないとしても救いに与ることができるでしょうか」と悩んでいました。（以下略）メアリー　B・グリフィス

夜間学校について

これは宣教活動の一環として1882年（明治15年）に東京の各地区に開いた学校が始まりとされている。正規の学校教育を受けることのできない、年齢、家庭とともに子女のために資質に応じて教養を身につけさせるところであり、デイ・スクールと呼ばれていた。デイ・スクールといっても、特に勤労青年を対象に夜間開いた学校もあった。夜間学校で教えたのは卒業生、在学生の上級生も参加している。

註）「青山女学院史」青山さゆり会篇（昭和48年11月16日発行）p46～47

7

ロシア捕虜との交流記事

アレキサンダー一家が滞在中の出来事として樺太で捕虜となったロシア兵が弘前に護送されてきた。アレキサンダー夫妻も自転車にて土手町にある宿舎の天理教の教会を慰問している。捕虜というイメージからは程遠い待遇を受けていたことが当時の新聞から読みとることができる。「弘前市教育史」「なつかしの弘前」でも紹介はしているが重複を避けるために本稿では「東奥日報」明治38年7月25日～27日付の記事を中心に紹介してみたい。

大佐ほか14名の将校が従卒と共に一時五十五分の列車で弘前に向かった。将校は二等、従卒は三等車と別々に乗り込み、車中の光景としては軍歌を歌ったり、口笛を吹いたり弘前に着くまで終始なごやかな車中風景であった。沿道の光景を次のように報じている。

（東奥日報　明治38年7月26日）

●各停車場には聞き伝えて人が集まり浪岡駅には最も多くありき　子供等は車窓より見て、露助＞と叫ぶ者ありしが、意味を知らざる彼等ニコニコとして子供等の活発なるを喜び見居りし各駅道野警部下車して一応取り締まりたり

●「車中の俘虜将校一行の乗車」（東奥日報明治38年7月26日）

一時十分（二十四日）将校は二等待合室に従卒は三等待合室に移し弘前行一時五十五分発普通列車に分乗せしめ第五連隊補充大隊の小林中尉之を監視せり

●弘前下車

漸くして（かくして）無事弘前に着し下車する

や整列せしめ人員及び荷物を検し将校は二等待合室に従卒は三等に休息せしめたり。

●捕虜将校と弘前

捕虜一行来弘するとのこと知れ渡り待ち受けたる市民は老若男女の区別なく見物せんと駆けつけたる群衆は停車場前人山を築きたり　やがて列車は十分も遅延して着駅せり　師団よりは佐藤副官憲兵隊より隊長以下拾数名の憲兵を牽き弘警署よりは加藤警視　野呂警部を初め拾数名正副巡査及び角袖巡査も警戒の任せり　停車場司令部員総出にて先ず停車場より収容所に達する道筋迄の取締は周到を盡くされたり先ず大佐以下を佐藤師団副官の案内にて愛国婦人会員の斡旋をなせる休憩所に入る

●在弘外国人の慰問（東奥日報７月 26 日）

大佐以下休息所に入り十分余過ごせし頃アレキサンダー外一名は自転車によりて来たれり　取締り警吏の案内を受け暫時慰問の挨拶を済まして来り

（註）明治 33 年 6 月 1 日（東奥日報）には次のような広告が掲載されていた。当時は自転車一台が 56 円であった。「弘前市統計第 8 回」（弘前市役所発行）によると尋常小学校の正教員の平均月俸は 17 円（男）11 円（女）であり、代用教員で 10 円の時代であった。

直輸入　臨時発売 自六月一日至十日間　スーダン両号 五拾六圓 普通正価　七十五圓 東京日本橋区　四七商店

●一行の通過光景（東奥日報７月 26 日）

一行は騎馬憲兵の先駆に前後左右側を警戒せられて何れも徒歩にて休息所を出す停車場より代官町に入り土手町に達し天理教会なる収容所に至れり　大佐以下の将校は沈黙して轉た威に耐へさるるものの如し従卒等は何の遠慮もあらわこそ快然として道途談話し歩を進めたる有様　浅間しかりき

●無事収容　（７月 26 日）

一時は大佐以下全員を天理教会堂に収容し在府町木村一太郎家屋に海軍少尉一　大尉二　外一名将校と卒二名都合六名を分容せり　此の三名は土手町より住吉通りを経て桶屋町　相良町に出て木村所有家屋に入れり　此の道筋も見物人群れをなして塵埃空を蔽いたり

●夜中の光景（７月 26 日）

右の収容所の付近は日暮刻まで子供等見物人も寄りしたるも中に入るを得ざれば見る事も得ず八時に達する頃は暗闇警戒衛兵の燈一ヶ見えるの外極めて静粛なりし

8

明治 23 年完成の外人教師館と焼失した宣教師館について

火災の起きたアレキサンダー家の宣教師館については明治 23 年にさかのぼる。最初に米国人教師館として建てられたのは明治 22 年 10 月 29 日の東奥義塾の校舎・寄宿舎が全焼したためであった。（『東奥義塾 120 年史』によると 25 日となっている）この時に同敷地内にあった米人教師住宅も類焼の被害にあっている。それまでは西洋館形式の住宅ではなく日本式の住宅であったため冬季間も快適に過ごせるための西洋式の住宅が必要であった。またこの時代は義塾を完全なミッションの傘下に置こうとしたことにも関係しておりアメリカのメソジスト・ミッションは弘前スクール（東奥義塾）を宣教の拠点校と考えていた時代であった。（1888 年のジョン。ウイヤーによる年会報告）

このような状況下に於いて建築予算は当時の2500円であった。

●洋館建築（明治22年10月19日東奥日報）

弘前市に於ける東奥義塾の今度更に雇い入れたる外国教師米国人フランツ氏の同塾構内に建築する家屋は其の予算金二千五百圓にして其の棟梁大工は東京より雇い入れ本年中は半ば着手し明春を待て落成をする積もりなりと

明治32年に焼失した宣教師館の再建築は明治33年6月に完成し入居が可能となった。なお総工費は九千円を上回る額であった。明治23年の建築の際には東京に請負を依頼していることから推測すると再建築に対してもメソジスト監督教会の指示と認可によるものである。

アレキサンダーは自宅の火災による損失額をアメリカの宣教師協会に報告すると同時に収支決算書を書き送っている。それによると年間の給与1000ドル、子供手当100ドル、特別手当300ドル、火災による損失額465ドルとなっている。

註）Missionary Society of the Methodist Episcopal Church 150 Fifth Avenue New York, September 10, 1901

註）明治33年6月2日　東奥日報

（前略）東奥義塾教師アレキサンダー氏は一旦故国に愛児と共に悲を抱いて帰りしも猶忍ばれるものは愛妻が墳墓の地にて永く愛児と共に此の弘前を家として

吾も奉げん見るもせしめん花束の露

国は異なれ夫婦親子の情には変わりなく遂に思いを定めて昨春同氏の令妹を携えて（中略）茲に再び邸宅を建築したるが中々壮麗なる構えにて工費は九千余円にて辻木某の請負になりたる由

9

Memories of 76 years recorded for my children and grandchildren

（私の子供や孫たちのために書き記した76年の思い出）に見る明治30年代の弘前

アレキサンダー一家が滞在した頃の弘前は廃藩後減少していた人口も増え始め経済も上向き始め出した時代であった。その一つの要因としてあげられるのが1894年（明治27）年に青森と弘前間に鉄道が開通したことがあげられる。また、1896年（明治29年）9月18日には第八師団の根拠地となったことで市況が膨張したことであった。先に述べたようにロシア兵たちとの交流や学校、教会など当時の地域社会との出会いを大切にしたアレキサンダー一家の見た当時の弘前を紹介してみたい。

この手記を書き残したファニー・グレイ・アレキサンダー夫人は1868年（明治元年）にテネシイー州で生まれた。父親はテネシイー・ウエスレヤン大学の初代学長を務め、後に実業家に転じたが彼女はドイツ、フランスに留学し、兄弟姉妹と共に世界各地を旅行した。日本と係わりを持つようになったのは1888年（明治21）9月から12月まで函館の遺愛女学校で無給奉仕をしたことに始まる。

1899年から1902年まで青山女学院の院長を務め、1903年から1904年までの弘前在住時には弘前女学校の校長職を務めた。また「全国母の会」の発起人の一人でもあった。本稿ではアレキサンダー氏と再婚し先妻の子ジョージと共に弘前で生活した頃の回想録から始めることにしよう。

筆者註）この稿での「私」はファニー・グレイ・アレキサンダー夫人を、パーシーは夫のアレキサンダー氏を指す。ベッシーはアレキサンダーの妹

1899年私達の同僚にとっての悲劇の年でした。厳寒の弘前での冬の夜に宣教師館が火災に遭い敬愛する婦人宣教師が命を失い彼女の夫と5歳になる息子がひどい火傷を負いました。同居していた古田トミは二階から飛び降り持ち出したのは聖書だけでした。女性伝道師である彼女は自分の

生涯を焼死した夫人のために捧げました。

後にアレキサンダー氏と息子のジョージが上京することになり、ジョージは私達の経営する幼稚園に入ることになりました。ある日のことですが、幼稚園の先生が私の部屋に来て言うにはジョージがよく泣くのだがどうもその理由がわからないとのことでした。その先生にジョージを私のところに連れてくるように言いました。泣きじゃくる彼を抱きかかえて聞いてみると、自分の手の爪を切ってくれる人がいないのだと言うのです。心の中では母を思い出し、恋しく思って泣いていたのでした。その時には、３年後に彼の愛しい亡き母の代わりの役目を果たすことになろうとは夢にも思っていませんでした。

1901 年（明治 34 年）の夏にベッシー・アレキサンダーが兄と甥と共にカナダから帰ってきました。私達はこの年の夏に何人かの WFMS（婦人海外宣教協会）の友人達と日光で過ごしました。

1902 年（明治 35 年）にアレキサンダー、ベッシー、とジョージの三人はヨーロッパ経由でカナダへ帰り、私は太平洋経由でアメリカへ帰りました。

1903 年（明治 36 年）の春に私とアレキサンダー氏と妹のベッシーとジョージは日本に向けて出航しました。パーシーは船のデッキでスポーツを楽しんだことを今でも良く覚えています。ベッシーはシンシナテーィ年会から派遣された正規の宣教師で日本へ戻ることになっていました。私は弘前女学校の校長として、またパーシーは弘前の夜間学校の校長として任命されていたことが横浜について初めて知らされたのです。ベッシーは札幌での宣教師として任命されていました。弘前は東京と全く違い別世界にいる感じがしますが、牧師夫人、銀行の頭取夫人やそれに 15 年前に函館の女学校での教え子がいたことが私に喜びを与えてくれました。

最初は年配の婦人達の話している内容がさっぱり判らず困惑しましたがやがてわかるようになりました。教会でお祈りのときに言葉の後「･･･ハ」と接尾語を付けるのです。以前、姉のメアリーが２年間弘前に住んでいたことがありました。私達が住んでいる家の一部屋には畳を敷いてそこを婦人達の集会の部屋にしています。というのは彼女たちは椅子に座って足をぶら下げるのをあまり好みません。

朝早く近所から耳障りな音が聞こえてくるので何かしらと思い探ってみると石に布きれを貼り付けて木槌で叩いている音であることがわかりました。（筆者注：文脈から見てこの音は他人から聞いた話である）

冬期間には殆ど毎日のように雪が降るので定期的に屋根に積もった雪をシャベルで下に落とすようにしているのは隣家に雪がかからないようにするためです。春が来るまでには通りにある家の二階まで積もることがあります。町の通りの歩道の上に屋根を掛けた通路ができるので道の向こう側に渡るときは雪をかき分けて渡らなければなりません。春が来て雪が溶けるようになると今度は何層にもなった氷状になった固い雪を切るために男達はのこぎりのような道具を持って通りに出ます。

私は寒さを防ぐために殆ど暖房が効かない学校の教室で冬に授業をするときには厚手の手袋をはめ、綿入れの厚いジャケットを着ていました。

公園として保護されている弘前城の敷地は春になると素晴らしい桜の花が咲き乱れそこから見る岩木山の姿は本当に言葉では表現できないくらい美しい眺めです。弘前の人達は正直で信頼のできる人達ばかりで、過去 60 年で此の小さな教会から 160 人以上の牧師と伝道者達が輩出されています。全国でも敬虔なクリスチャンのたくさんいるのも珍しいことです。

今までの私の生活の中ではパン屋さんでパンを買うことができましたが弘前ではそうはいきません。ですから、手元にある料理の本にはイースト・パン（固形生イースト）つまりイースト入りのパンの作り方だけ載っていますが、弘前ではイーストは手に入りません。そこで夫のパーシーは昔祖母がイーストを作るにはジャガイモとホップを混ぜて使っていたことを教えてくれたので、実験的

に何度も繰り返し失敗を重ねながら遂にパンを作ることに成功しました。それが本当に食べられるのです。私は次にパンを作るためにイーストを大事にとっておきました。

女学校の校長職の傍ら授業を何クラスか受け持ち、またジョージのために一緒に勉強する時間も必要でした。私が何時も時間通りに始業の鐘（筆者注：手に持って廊下を歩いて鳴らす鐘のこと）を鳴らしている間は飽きる様子はないのですが、女生徒の中に小さな男の子が一人でいることは矢張り退屈であり学校で過ごすことには全く興味がないようです。

弘前には私達一家以外には外国人はおりません。夜間学校の生徒達はよく私達の家に集まり、その中には大変熱心なクリスチャンのグループがおります。これらの生徒達は焼失した教会（筆者註：明治 37 年４月 16 日隣家の神写真館より延焼した弘前教会のこと）をもう一度建て直そうと熱心に募金集めのために一生懸命働いていますので私達は彼らのためにできることは何でもしようと思っています。弘前に着いてまもなく私の一番下の弟が天に召されたとの知らせが入りました。

弘前出身の日本人のクリスチャンの中で初めてメソジスト教会の初代監督になったのは本多庸一監督でした。彼の甥にあたる阿部監督は三派合同が実現する前の監督でした。

1904 年の秋は赤十字の仕事や日露戦争で弘前に連れてこられ、負傷した兵士達との面会等で大変忙しい思いをしました。弘前は軍の町で大きな軍の病院もありました。私は 12 月に出産予定でしたが、驚いたことに 11 月の下旬になってしまいました。秋田にいるニーナ・スチーブンス博士が汽車で６時間かかるのですが来てくれることになっていました。ところが、駅に着いた時にはもう既に汽車が出てしまったのでもう６時間待たなければならない旨の電報が来ました。そういうわけで、外国人の家に来たことがない日本人の医師と看護婦が看てくれることになりましたが、一番の慰めは夫と看護婦の経験のある聖公会から派遣されたミス　ルル・ボイドが私の側にいたことでした。夜になって夫は暖房のよく効くストーブの置いてある二階の居間にベッドを移動してくれました。スチーブンス博士はフランセスが生まれる一時間前の夜６時に到着し、ロバートは 11 時間後の翌朝の６時の出産となってしまいました。誕生日は 11 月 25 日と 26 日になり、父親の誕生日が 24 日ですから父親にとっては本当にすばらしい誕生日プレゼントになったわけです。私は一人の出産と思っていたので、一人用の準備しかしておりませんでした。多くの日本人やメソジスト監督教会のミス･マン、ミス･グリフィス達がベッド用品や衣類の世話をしてくれる為に来てくれました。３日間、ミス・ボイドは夜も昼も一緒にいて世話をして 10 日間も待機してくれました。ミス・ボイドが秋田に帰って入れ替えに今度はベッシーが暫くいることになりました。生まれた時は２人共５ポンドの体重で、３ヶ月後にはフランセスは８ポンドになりましたが、ロバートは僅か５ポンドしかありませんでした。（以下略）

驚いたことに、日本では双子の出産は不吉、縁起が悪いと思われていることです。ある日、ひとりの老婦人がお祝いに卵を一箱持ってきてくれたのですが、私には双子の一人を養子に出す親戚がいないのを知って残念がっていました。

ロバートの体重が増えず虚弱状態を看て日本人の医者は生きるのは困難だと言ったその医者に今は６フィートにも成長したロバートを見てもらいたいものです。私は 48 足もの幼児用の毛糸のクツを用意していたのですが、東京からはもう６足分の小包が送られてきました。女学校の先生達からは４ヶ月後に着ることができる綿の入った毛糸のコートをもらいました。７ヶ月になるまでにはロバートはフランセスの体重以上になりました。17 歳になる “オミチさん” に赤ん坊の世話のために来てもらうことになりましたが、このことについてはよく覚えていませんが、確か来てくれたのは子ども達が “ヨヨ” と呼んでいました “オヨネさん” でした。（中略）

私達は 1905 年の夏は弘前で過ごしました。多くの時間を家の前庭にテントを張って過ごしま

した。双子の子供達はよくテントのポールにしがみついて走り廻っていました。私がよく目にした行為はテーブルの下に付いている低い台の上でリンゴを手で転がして遊んでいました。テーブルの端からリンゴが片方の端の方に向かって転がっていくとリンゴと一緒に這っていたのを覚えています。今そのテーブルはフランセスの家にあります。

もちろん私は双子の子供が生まれる前に女学校の校長をやめていました。夫のパーシーはよく熱を出すのですが、ある時は105度（註：華氏）にも上がり、それが次には急に下がり通常の体温になったりしました。後でわかったのですが、鼓膜に障害が出ていたのです。夫の状態が悪い時に今度はジョージが麻疹（はしか）に罹ってしまいましたが、幸いに双子もジョージも次々に快方に向かいました。（以下略）

私は我が家で婦人集会を開きその伝道活動を応援し、また幼稚園の園児達を招いたり、他に学生等もよく来ました。少しばかり不器用で田舎娘の“オカツさん”ですが我が家で働いてもらうことになりました。ともかくよく物を落とすのですが、彼女は私の背中が痛んだ時さすってくれ、そのお陰で痛みが嘘のようになくなりました。彼女には痛みを和らげてくれる素晴らしい手をもっていることを誰も知りません。

日露戦争が終息を迎え多くのロシアの捕虜たちが日本に連行され弘前にもたくさん来ました。軍当局から健康状態の思わしくない大佐の一人がいるので我が家で引き受けてくれないだろうかと打診がありました。この大佐が捕虜として連れてこられた時15歳の息子も弘前にいる父親に面会を希望し許可をとり我が家にやって来ました。そういう訳でメルニコフ大佐とニコライ大佐が我が家の家族になりました。その大佐は若い頃ドイツ語とフランス語を勉強したことがあり、ラテン語の知識もありました。メルニコフ大佐は少し日本語を、ニコライ大佐は英語が少しわかります。このようなわけで、食事時の会話はドイツ語、フランス語、ラテン語、それに日本語と英語が飛び交う状態でした。彼らは私達にロシア語を教えてくれました。息子のジョージとニコライ大佐は大いにチェスを楽しみ、ジョージは自分が勝った時にはSchack（注：相手のkingに自分の駒を効かせて取ろうとする手のことを意味する）“シャック”“王手”というロシア語を覚えました。軍当局は何人かのロシアの上官達は我が家を尋ねてもよいという許可を出してくれ、条件として夕方までに彼らの兵舎に戻ればよいことになりました。彼らはとても音楽好きで大佐はよくバイオリンを弾き夫も息子のジョージも音楽が好きになり、私達は共にとても楽しい時を過ごすことができました。ロシア人の部下がメルニコフ大佐の衣類の世話をしたり軍靴を磨いたりする為に毎日我が家にやって来ました。ある日彼は私達の為にロシア料理を作ってくれました。その日わたしは英語のcabbage（キャベツ）に相当するロシア語の［kapusta］を覚えました。

双子の最初の誕生日にベッシーからは白い絹のドレスを貰い、梅さんからは柳で編んだ小さな椅子をもらいました。祖母のヴルームからは彼女が子供達の為に編んでくれたショールを又メルニコフ大佐は弘前市内の花やから花を買い求めようとしたのですが新鮮な花を見つけることができず、その代わりドレスに付ける人工の花を誕生パーティーにと用意してくれました。とてもかわいらしくなったので我が家の隣に住む写真屋に来てもらい小さなイスに座っているところを記念写真に撮ってもらうことにしました。

1月の中旬頃までになると、ジョージはソリを持って外に出てもいいことにしました。ソリには箱をしっかりと括り付け誕生日プレゼントに貰ったショールを被り外で遊ぶ姿はとても楽しそうでした。夫は春になると耳の具合を看る貰うために東京に行きました。

（以下略）（筆者注：その後アレキサンダ一家は東京の青山学院の構内に移り住んだ）

アメリカン・スクールに通い出したジョージは16歳のクラスに入り成績も良く、中間試験も終

わり校長先生からのレポートには「試験の出来映えはすばらしく、全科目に於いて優秀な成績を修めました」と書かれていました。

通学には６マイルの距離を自転車で通いましたが、実はそれが健康のために彼にはとてもよかったのです。夫が不在の時は外での仕事は「母の会」と大学の男子学生向けのバイブルクラス以外の仕事は極力避けました。当時私は「全国母の会」の会長をしておりましたが、そのための時間がほとんどとれませでした。

1907 年４月 26 日娘のメアリーがホイットニー先生の病院で生まれる予定のちょうど１週間前に夫がサンフランシスコから帰ってきました。双子にとって妹のメアリーが生まれたことでとても興奮していました。夫はまた銀座の夜間学校で教え始め、同時に青山学院でも何クラスか授業を受け持ちました。1907 年の夏には二ノ岡（御殿場にある）にある姉の所有していた別荘の向かいの山荘を買いました。

青山学院の構内の２号館にはドイツ人の医師が住んで居り、彼はそこから出て行こうとしませんでした。（中略）一週間後ようやく私達は家族全員が住める日本住宅を近くに見つけ引越をすることができました。11 月１日に２号館が空くまでに、私のリュウマチがひどくなり２週間新しい家のベッドに寝たきりでした。幸いなことに、東京にいた弘前出身のオナミさん（子供達は彼女を“ナナ”と呼んでいるのですが）と、もう１人“ヨヨ”さんが子供達の世話をしてもらうために我が家の一員となりました。

青山学院の２号館が私達の 34 年間の住所となりましたが後に２号館は別の敷地へ移りました。この敷地は３エーカーの広さがあり、畑には食べきれないほどの苺が、畑一面に実っていました。そのほかにも果物の木が植えられ、広々とした芝生の上には 15 本の桜の木が花を咲かせてくれます。住宅の西側には大きな銀杏の木が歩道に沿って植えられています。その銀杏の大木の下に６人の子供達用と４人座れる大人用のブランコを取り付けました。玄関の南側には大きな常緑樹が植えられて、敷地の南東側には岡があり、時々そこでピクニックをしてみんなと会いました。岡の上には別に日陰になる巨木があり、その木の下の廻りには赤や白の椿の花が咲きほこります。春になると歩道は色とりどりのチューリップで縁取られ、たくさんの木々には美しい花が咲きます。ちょうど台所の向かいにはお手伝いさん達の家が見え、その少し向こうには小屋と鶏小屋が見えます。岡から少し下の平らな芝生の上で子ども達がよく鬼ごっこをして遊んだものです。ちょうど右側には木登りのできる木がたくさんありました。

以上私が当時のことをいろいろと描写したのは孫達が自分の両親がどんなに日本で楽しい子供時代を過ごしたかわかってもらうために書いているのです。

我が家の庭の手入れをしてもらうために老齢の山口さんが来てくれることになりました。彼には奥さんと４人の子供がおりました。この人は都会生活のことはもちろんのことキリスト教のことも何も知りませんでしたが、後に彼は熱心なクリスチャンになりました。一度だけ私の言ったことを拒否したことがありました。それは彼が来て間もなくのことですが、庭に一匹のヘビがいたので彼に殺すように言ったところ、彼が言うにはへびにはご先祖様の霊が宿っているので殺す事は出来ないと言い張るのです。仕方なく私がヘビを殺しました。山口さんは冬の夜には桃の実に虫が付かないように桃にかぶせる紙の袋を作っていました。この袋を春になると、黙々と一つずつ桃の実に袋を被せる作業をするのです。

私はお手伝いの人達とよくお祈りの時を持ちますが次第に彼等は救い主イエス・キリストを受け入れるようになりました。数年後山口さんは腸チフスに罹り高熱を出したので、東京の郊外にある感染症専門の病院へ入院しなければなりませんでした。そこで私は毎週見舞いに特別に食べ物を用意して持って行きましたが、だんだんと、回復は無理のように見えました。しかし、彼は見事に危機を乗り越えることが出来たのです。（中略）数年後、夫と私は山間にある小さな家を訪ねたこと

があるのですが、この村では彼の一家が唯一クリスチャンで彼の妻と年老いた娘は毎日聖書を読み、讃美歌を歌うのだと話してくれました。わたしは時々「母の会」の小冊子を送りました。あらゆる機会を通して彼は伝道し、村人たちを導いたということです。私達が 1941 年に日本を離れても彼とは長く交流を持ちました。

ジョージはピアノのレッスンで才能を発揮するようになり、やがて皆が彼のことを賞賛すると自慢するようになりましたので私は彼に次のように戒めたことがありました。「あなたが自慢している音楽の才能は天国にいるあなたのお母さんがあなたにくれた賜物なのですよ。そのことに深く感謝して決して忘れてはいけません」。今ではこのわたしの一言が彼の生涯に影響を与えたと思っています。

夫の妹ベッシィーが 1908 年にカナダに帰ることになったので私達は彼のことを考え母国の学校へ行かせることにしました。というのは当時東京には英語で教育してくれる高等学校はありませんでした。また日本の学校では男子は全員丸坊主にすることになっており、ジョージは私達の忠告には耳を貸そうとはしませんでした。彼はカナダへ出発まで髪を伸ばしたままでいました。カナダに着いて町を歩いていたら通りがかった紳士に他の男の子と違ってジョージの髪は短すぎると言われたそうです。

ジョージが帰国して２日後にメソジスト関係の母親達とその子供達とピクニックが我が家で行われました。出席者は 250 人でとても楽しい時を過ごしました。一週間後に今度は「東京禁酒会」のピクニックの会がありこれには 150 人が参加しました。ほとんど芝生で過ごしましたがピアノや琴の演奏もあり 70 人から 80 人が我が家の書斎や居間に集まり演奏会が行われました。

夫がジョージへ手紙を書くときは、このように書いていました。「人数が多すぎてどのように演奏したかわからないが、とにかく無事に終わったよ」

メアリーが２歳になった時に双子をアメリカン・スクールと関係があり若いフランス人が２人で経営している幼稚園に入園させました。いつも私はメアリーを連れて子供達と一緒に学校へ行きますが、約７マイルも離れているので学校が終わり家に帰る時間まで幼稚園に居ることにしました。ある日、分校で長年数学を教えていたコーツ婦人が３ヶ月間カナダへ帰らなければならなくなったので私にその替わりを務めてくれるように頼まれました。彼女が言うには誰も引き受け手がいないとのことでしたが、実は私は数学が苦手なのです。しかし子供達が帰るまで学校にいるのだから、断るのも何か気が引けて承諾してしまいました。ところが、コーツ婦人は３ヶ月どころか６ヶ月も休んでしましました。（中略）

ボブとフランキー（フランセス）はメソジスト教会附属の幼稚園に入りアメリカ生まれの杉本チヨノを除いて外国人は２人だけです。杉本チヨノは全く日本語がわからないのでボブとフランキーが彼女のために通訳をしてあげなければなりませんでした。

1907 年にはメソジスト監督教会、南メソジスト監督教会とカナダメソジスト教会が三派合同となり日本メソジスト教会として発足しましたが、私達の学校の（注：青山学院）院長である本多庸一先生がその監督となりました。本多夫人にお祝いの言葉を述べたところ、ほとんど涙を流さんばかりに、「学院に勤めていた時は毎月の給料は決まっていたので、使える額は判るのですが、今度からは収入がいくらになるのか判らないので家計のやり繰りをどうしたらよいかわかりません」と語ってくれました。監督になって喜ぶはずなのですが、それ以上に夫の収入の方が心配のようでした。

ジョージが私達のもとを離れてからボブとフランキー（フランセス）は何時も彼のことを話題にしてどうしたらジョージに会いに行けるだろうかと話すのです。ロバートがジョージの着ていたスーツの布地を使って裁ち直したものを着ると、決まって次のように言うのです。「ジョージはどこにいるの」「アメリカなの」「どうして帰ってこ

ないの」と。

1908年の夏は昨年と同様に雨が多く、台風のために一部屋根がはがされ、大木の枝が折れました。私達のお客として来ていた、ミス・ラッセルとミス・リーは二日間富士山の頂上で孤立状態になりました。（中略）

ある日私がとても疲れていたとき、ロバートが「僕はお母さんにやさしくしてあげるから」と私の側に来て言ってくれました。私の疲れはやがて腸チフスの症状となったのでクリスマスの準備を変更せざるを得なくなりました。医者はクリスマスイブに私の部屋に子供たちが入って来てサンタクロースの靴下をタオル掛けに下げるために短時間だけなら起きても構わないと言ってくれました。フランセスは私が顔を壁側にむけて寝て欲しかったようです。なぜならば、かれらが贈り物をいれるところを私に見られたくないからです。翌朝子ども達は

「天にはさかえ　御神にあれや、
　　つちにはやすき　人にあれやと」

を歌い、それぞれ、靴下のなかに入っている中身をみて歓声をあげていました。夫も子ども達に「神の御子は今宵しも」（現行讃美歌111番）を高音で歌ってあげました。子供達は私の部屋の隣にあるクローゼットに行き、ジョージに送るつもりでいたプレゼントをたくさん詰めていました。

夫は夜間学校で朝鮮人に教えるほかに財務委員会の書記を任され青山学院では週あたり11時間教えてくれるように頼まれました。夜間学校と掛け持ちをしながらです。ある晩17人の朝鮮人の男子学生が我が家に来ました。ある男子学生は日本語と朝鮮語がわかり、また何人かは英語と朝鮮語、３カ国語全てわかる学生もおりました。この学生たちは金曜日の夜は親睦のために我が家に集まりました。クロキノールをやって（室内で行うカーリングのようなゲーム）いつも負けると“Goot gracious”（Oh, my God）と言うのが学生達の口癖でした。

ある日の夜、フランセスはいつものように遅くまで起きていたら、オヨネさんが「ローバートのように早く寝なさいね」と注意をしたところ、フランセスは「だって、私は男の子じゃないもん」と切り返しました。続けて「女の子は男の子よりもっと早く寝ますよ」と言うとフランセスはこう言いました。「アメリカの女の子は違うのよ」ですって。

桜の花の咲く季節には幼稚園の園児全員とお花見のパーティーをしましたがフランセスはよく半分揺り動かした状態でハンモックに座っていました。

1909年の５月に子供達は水疱瘡に罹り咳がひどく百日咳のような状態でした。末のメアリーの百日咳は特にひどく、夏に入るまで続きました。

５月にはまた、アメリカの副大統領のフェアバンクス夫妻が日本を訪れました。「アメリカ友愛協会」主催の盛大な歓迎会が三井倶楽部で行なわれました。フェアバンクス家はオハイオ・ウエスレアン・大学の卒業生で東京ではウメと私だけがウエスレアン大学の卒業生です。私と夫が歓迎会に招待されたのはアデレイド・フェアバンクス夫人が私の教え子だったからです。その歓迎会に出席するために、私は手持ちの洋服の中で最も見映えの良いドレスを選んだのですが、絹や、きらびやかなサテンのドレスを着たり、金の飾りを織り込んだ洋服を着た婦人方の中では所詮私は“田舎者”に過ぎませんでしたが、楽しい時を過ごすことができました。何よりも人生の華やかな一面を見て楽しい時を過ごす事ができましたが、どうも私には自分の生き方の方が合っているような気がしました。

フランセスが５歳くらいになった頃、仙台にいるルース・スワーツの結婚式の指輪を運ぶ係りをしてくれるように頼まれましたので連れて行くことにしました。そこで、私はフランセスに行儀良くしなければ連れて行けないのだといいました。するとその夜から最上級の礼儀ただしい言葉遣いをするようになりまた昼寝の嫌いな子なのですが次の日から昼寝をするからと言ってくれました。

初めて弘前へ行った帰りに仙台に立ち寄りました。監督教会のミス・マンがアメリカから大きな

人形を取り寄せました。そのわけは弘前の母親たちに乳幼児の保育の指導をするためでした。

この人形については船荷を横浜で降ろしている間、誤って人形の入っていた箱が海に落ちてしまいました。一週間後に弘前で開けて見たところ人形の赤ちゃんは目が飛び出ており、髪の毛は絡み合って、洋服はカビでよごれ、少し革を使ったクツは縮んでいました。ミス・マンはフランセスが人形を抱きかかえたのを見て、とてもよろこびました。ミス・マンはフランセスが破損したかわいそうな人形をかわいがってくれるなら、それをあげるわ、と言ってくれました。そこで私はその人形をきれいに洗い、洋服にアイロンをかけてやり、ブラシをかけ、髪にはカールをつけてやり、きれいな人形に仕立てました。

東京へ出発する少し前に子供用のピンク色をした子羊の皮で作った靴下を持って列車の窓際に駆け寄って来た一人のおばあさんが言うには孫には小さすぎるけれども、人形の赤ちゃんにはちょうど合うと思うので受け取って欲しいとのことでした。汽車の中では珍しがって乗客たちが、次から次と人形の前に立ち止まり、「アメリカの赤ちゃん人形だ」と言って見ていました。フランセスは今でもその人形を持っています。弘前ではアメリカの人形と大きな日本人形をもらいましたので、汽車の中でフランシスはその人形をまるで自分の家族のようにかわいがりよく世話をしました。

弘前の後藤さんは洋服の仕立屋さんですが、私達のためにとても良くしてくれました。彼は結婚式に出席するフランセスのためにとても優美な白い絹製のドレスを作ってくれました。そのドレスに似合う白いリボンと白いクツを履いて白い絹製のクッションの上に結婚指輪をのせて教会の通路を行進している可愛らしい姿を写真に撮りました。この結婚式のために二回練習しましたが全て順調に行われました。

ロバートは野生の花や蝶にとても興味がありました。ある日彼は私を小さな花が咲いているところに連れて来て「お母さんの顔をうんと近づけてみて。とってもきれいだから」と言い、夜、お祈りをするときには神様にもっと、もっと大きな蝶々にしてくださいと祈ったものでした。このようにロバートはとっても心の優しい、想像力の豊かな子です。（中略）

私達の子供達についてのお話は 1908 年にジョージがカナダに帰った書簡集Ｘまで書き続けました。

ジョージは夫の祖父母の近くにあるプリンス・エドワード島のシャーロットタウンにあるプリンスオブウエールズ大学に入学しました。何よりも私達夫婦が喜んだことは 1910 年にジョージが教会員になったこと、大学での研究成果が向上したことを知らされたことでした。彼の叔母にあたるアニーはジョージはとても良い青年で、誰からも信頼され、両親が不安に思うことは全く必要ないと報告してくれました。（以下略）

10

アレキサンダー先生の人格と英語指導法について

残念ながら弘前夜間学校や東奥義塾で実際に行なった英語の授業の具体的な記録は残されていないが青山の生え抜き教師として青山学院の学風形成に寄与された神子　朝太郎（1895 年～1973 年）はつぎのように証言している。

カナダ出身の先生は 47 年間も日本の英語教育に尽くされ、特に低学年の指導に熱心でした。白いヒゲの老人は、歯抜けていて、発音するたびにピーピー音がするので、生徒はくすくす笑った。先生は一年坊主を英語に慣れさせるために、動作とともに英語を口に出すこと、たとえば―

I stand up on my seat.
I go to the door.
I open the door.
I shut the door.
I go back to my seat.
I sit down. といいながら、一人一人自分の席とドアの間を往復したんです。

先生は真摯なる篤学者であられただけ信念は堅かった。外語の授業は初年級に於ける練習を最も有効と信じ、進んでこれに当たられた。一般にあまり喜ばれない一年級の授業を先生は喜んで為された。先生の授業時間は一、二年級だけでも十五、六時間に上った。（中略）先生は壇上に立たれると、すぐに授業を開始されたが、その瞬間に一種の雰囲気は作られるのであった。先生は英語をありのままに聴き取らせ、それを発表させ、練習させようと努められた。先生はその授業を見せ物などにはしようとはされなかったが、自ずから定評を得、某権威者によって激賞せられた。当時既に相当の年齢であられたが、労を忘れ、倦むことなく、一人一人練習せしめられた熱心さを見る時、若年の附添教師は何時もすまないと思った。

註）青山学院大学プロジェクト９５「戦争下の母校―青山学院と地の塩たち」p165　p341

・ロバート・パーシバル・アレキサンダーは1940年（昭和15年）１月６日午後１時聖路加病院にて生涯を閉じた。享年79歳
埋葬は多摩霊園

・ファニー・グレイ・ウィルソン・アレキサンダーは1957年（昭和32年）ニューヨークコロニーで89歳の生涯を閉じた。
夫妻とも多摩霊園に埋葬されている。

・ジョージ・デトマース・アレキサンダーは帰国後1983年（昭和58年）カナダのカルガリーにて死去　享年89歳

あとがき

現在市立観光館、旧図書館、郷土文学館の辺りは昭和63年７月に石川に移転するまでは東奥義塾の校舎と礼拝堂があったところである。

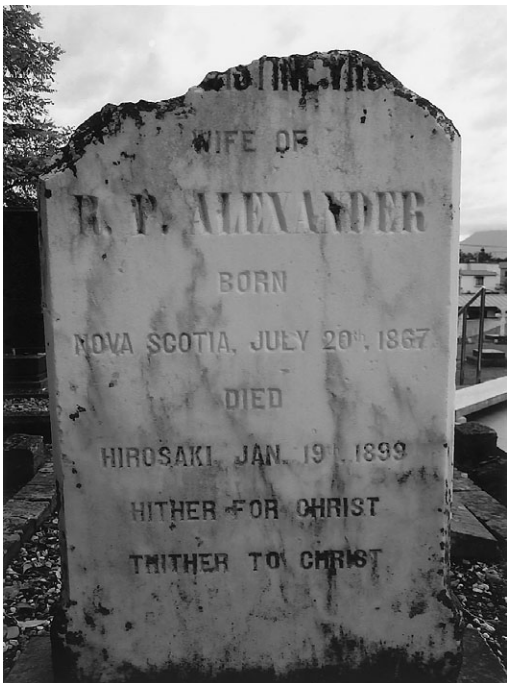
当時の面影を残す建物といえば旧東奥義塾外人教師館ぐらいであろう。筆者が在学していた頃は中学が併設されており常時２人のアメリカ人の教師が英語会話を担当していた。後にわかったことであるが、彼等は戦後Ｊ－３といって日本の大学、高校や中学で３年間英語教育の為に働くことを目的とし大学卒業と同時に派遣されてきた教育宣教師であった。当時はまだアメリカ式の生活が珍しく月曜日の放課後二階の先生達の部屋で行われるオープン・ハウスによく出かけたものであった。毎週土曜日に行なわれる英語のバイブル・クラスも彼等の課外の仕事の一つで、英語の勉強も兼ねて公立の中・高の英語の先生達の出席も盛んであった。一階の暖炉のある部屋の窓から差し込んでくる夕陽を背にして折りたたみ式の古いイスや古いオルガンの伴奏で歌った英語の歌や讃美歌は今でも口ずさむことができる。二階に上がる途中ギシギシと音の出る階段と床用に敷かれたワックスのにおいは何とも懐かしい思い出であり、当時の頃が鮮やかによみがえってくる。彼らから直接英語の指導を受け、スピーチ・コンテストに出場した体験は筆者にとっては貴重な財産である。青山学院を卒業後学院の資料センターの展示室で初めてアレキサンダー一家が明治期に弘前で過ごし後に学院の構内に住んでいたことなど在学中は知る由もなかった。

現在ある旧外人教師館には明治期に来日した歴代の宣教師達が住居として使い昭和48年まで約20名の宣教師達（中には家族持ちもいた）が生活していた。”Memories of 76 years” に登場する写真家は下白銀町六番地の田井　晨善（あきよし）の屋敷のことでフランセスの写真を撮ったと回顧録に書いてある。弘前の写真の開祖といわれた。

拙著『弘前に滞在した明治の知られざるジャパノロジスト』のマクレイも隣家の写真家のことを取り上げている。明治９年の明治天皇来県の義塾生による御前授業や４名のアメリカ留学の出発前の記念写真にも当時の田井写真館で写したものである。

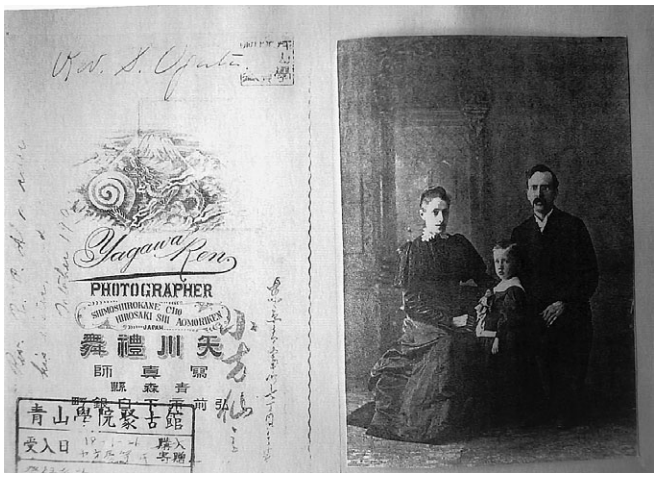
旧外人教師間は昭和63年に弘前市に寄贈され改装後は一般公開されているがこの改装にあたりマリリン・ガーハードさんの母親であるイザベル・ガーハードさん（1997年死去）から内部の改装

にあたり詳細にわたり教示を受けたと言われている。史料室にはガーハードさんの寄贈によるファニー・アレキサンダーが結婚式に着たウエディングドレスが展示されている。本稿のためにアメリカのサクラメント在住のマリリン・ガーハード夫人とカナダ在住のロバート・ラッシュ氏には貴重な資料、写真、情報の提供をいただき深く感謝いたします。

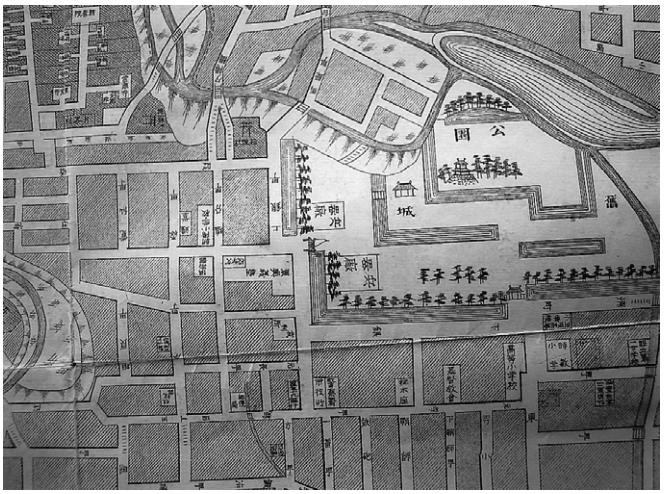


墓碑　メアリー・クリスティン・アレキサンダー（弘前市・最勝院）

メアリー・アレキサンダー
TIDINGS Vol.II. No.1 p4

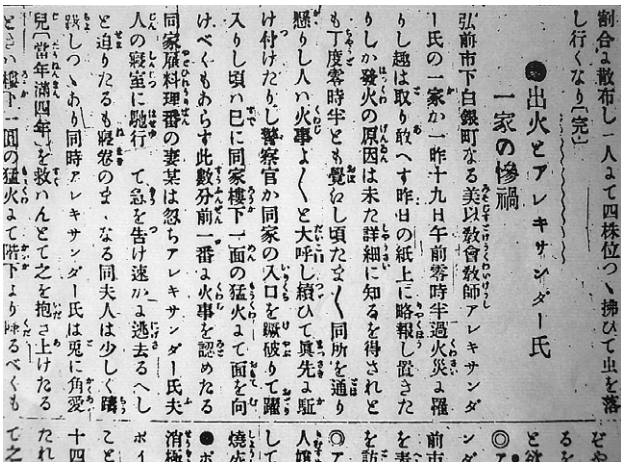


アレキサンダー　一家（青山学院　蔵）



明治 30 年代の弘前市内地図
アレキサンダー一家が生活した頃の
白銀町、塩分町、元寺町、朝暘小学校
時敏小学校、高等小学校、柾木座の位
置がわかる

（弘前　近松書店）弘前図書館蔵

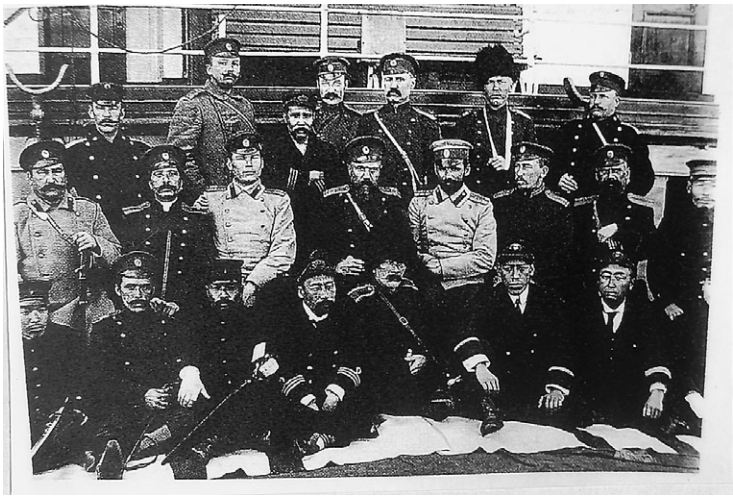


割合は散布し一人は四株位づゝ拂ひて虫を落し行くなり〔完〕

●出火とアレキサンダー氏
一家の慘禍

弘前市下白銀町なる美以教會教師アレキサンダー氏の一家は一昨十九日午前零時半過火災に羅りし趣は取り敢へず昨日の紙上に略報し置きたりしが發火の原因は未だ詳細に知るを得されども丁度零時半とも覺ゆる頃たゞ〳〵同所を通り懸りし人い火事よ〳〵と大呼し續ひて眞先に駈け付けたりし警察官が同家の入口を蹶破りて躍入りし頃ハ已に同家樓下一面の猛火にて面を向けべくもあらず此數分前一番に火事を認めたる同家雇料理番の妻某は忽ちアレキサンダー氏夫人の寢室に馳行て急を告げ速かに逃去るへしと迫りたるも寢惚の甚しなる同夫人は少しく躊躇しつゝあり同時アレキサンダー氏は兎に角愛兒〔當年滿四年〕を救はんとて之を抱き上げたるとき樓下一面の猛火にて階下より陳るべくも

明治 32 年 1 月 21 日　第二千八百五十四号
東奥日報



捕虜となったロシア人将校
青森県史　資料編　近現代２より転載

弘前教会再建工事
明治 40 年新会堂新築（8 月 26 日）
「目で見る弘前、黒石、津軽の 100 年」
より転載

ロバート JR.　R·P アレキサンダー SR　ファニー W. アレキサンダー　フランセス

メアリー　イザベル

アレキサンダー一家
（「来日メソジスト宣教師事典　教文館」
より転載）

1948 年　ニューヨーク・アルバニーにて
（カナダ在住　ロバート・ラッシュ氏提供）

メアリー・スタンプリー
フランセス・ラッシュ
イザベル・ガーハード
ロバート・パーシバル・アレキサンダーJr
ファニー・アレキサンダー
ジョージ・アレキサンダー

参考文献

・Memories of seventy six years recorded for My Children and Grandchildren
・TIDINGS from Japan December 1898~1904
・Missionary Report 1898~1904
・Missionary Society of the Methodist Church New York, September 10, 1901
・来日メソジスト宣教師事典（教文館）
・青山学院九十年史（青山学院）
・青山女学院史（青山女学院さゆり会）
・青山学院と地の塩たち（青山学院大学）
・弘前教会五拾年史（弘前教会）
・弘前学院百年史（弘前学院）
・弘前市教育史　別巻　年表　学校沿革
・写真で見る東奥義塾 120 年史（東奥義塾）
・再判鷹丘城　（弘前市立図書館蔵）
・弘前市内新地図―近松書店　明治 38 年
・「ここに人ありき」851～956 陸奥新報
・青森県総覧（東奥日報社　創業 40 年記念）
・『草創期の私学教育に貢献した外国人教師』『弘前に滞在した明治の知られざるジャパノロジスト』（拙著）2000 年、2009 年